

02-33

退院支援にむけて効果的なカンファレンスへの取り組み

熊本赤十字病院 看護部 療養支援部門

○モーエン^{ともこ}智子

【目的】療養支援部門では、毎日スタッフが退院支援に関するカンファレンスを行なっているが、その目的は明確になっていない。スタッフがカンファレンスを活用することで支援への困難感を解決でき、自信を持って支援できるようカンファレンスを見直し、その共通理解を図ることで、カンファレンスの目的やそれぞれのスタッフが担う役割を再認識でき、チームの成長のツールとなることを目的とする。

【方法】1. 平成24年8月から12月までの期間、実態調査を行ない、療養支援部門のスタッフ4名に対し質問紙調査を実施する。2. カンファレンスの見直しは、ドナベティアン・モデルを活用して勉強会を実施。

【結果】事例提供数に対し助言数が20%と少なく、カンファレンスのほとんどが事例の報告にとどまっていた。また、どのような目的で事例の提供を行なっているのかの質問に対し、困難事例の相談75%、支援状況におけるスタッフの具体的アドバイスをうけたい75%、病棟との協働に対する報告50%、情報共有50%との結果であった。スタッフはそれぞれ目的を持ってカンファレンスに参加しているが、現状との相違が生じていることが明確になり、効果的なカンファレンスが実施されていないことが分かった。また、スタッフに勉強会を実施した事で、カンファレンスに求められる結果と成果が明確になり、積極的に参加するようになった。

【結論】今回カンファレンスに対する共通理解を図ることで、スタッフは積極的に支援困難事例を挙げるようになり、また助言数も増えた。また、カンファレンスのルールと心得を説明したことで、自分の発言に責任を持ち、年齢や職務に捉われないといった活発な意見を導くツールとなった。これにより療養支援部門のチーム力を強め、スタッフの退院支援の実施へとつながった。

02-35

入退院センターで行う入院説明に対する患者の思い —アンケート結果から—

長野赤十字病院 入退院センター

○早川^{はやかわ きみこ} 公子、大塚 貴子、島 浩子

1. はじめにA病院の入退院センター（以下センター）では、予定入院患者に対して、業務の効率化及び患者の満足度向上等を目的に、クリニカルパス（以下C・P）を使用して説明を行っている。外来診察で入院決定後、センターの個室で看護師から説明を受けることを、患者はどのようにとらえているのかを調査した。2. 調査方法 独自に調査用紙を作成し、センターで説明終了後に了解を得た患者に配布した。回収は、当日または入院日に持参または投函用の箱を準備した。3. 結果設問1「センターで説明を受けることについて」1）「センターへの移動」を、63.2%が「負担に感じない」23.5%が「どちらでもない」であった。設問2「説明内容について」1）「入院までの予定」は、94.1%が「わかりやすい」2）「案内書類」は、92.6%が「わかりやすい」3）「入院準備品」は、92.6%が「わかりやすかった」であった。4）「C・P」は、92.6%が「入院中の治療・生活の予想ができた」5）85.3%が「C・Pがあることで安心につながった」と回答した。一方、患者からの要望は、「退院後の生活、注意事項の記載があると良い」などがあつた。6）「説明による気持ちの変化」では、61.8%が「入院への心構えができた」であり、設問3「個室で説明を受ける環境」については、64.7%が「聞きたいことが聞け、話ができ」、61.8%が「他人の事を気にせず説明を受けられた」であった。4. まとめ1）センターに移動して入院説明を受ける事は患者は負担に感じていない2）センターでの説明は、患者の満足度のいく内容であった3）患者用C・Pに、退院後の生活に関する記載要望がある4）看護師から入院説明を受ける行為は、患者が入院への心構えができる支援の場となる5）個室での説明は、患者が聞きたい事が聞ける環境である

02-34

赤十字病院における専門看護師の活動3 —子どもの地域連携活動について—

武蔵野赤十字病院 日本赤十字専門看護師会

○尾高^{おだか だいすけ} 大輔

【目的】

武蔵野市では毎年、日帰りから宿泊まで様々な社会事業を開催しており、当院では引率する看護師の派遣依頼を受けている。今回、子どもに関する事業の運用の調整や作成した手順書の見直しを行ったので、その取り組みを報告する。

【取り組みの実際】

1. 学童における学外活動や親子キャンプなどに関する事業は、関連部署のスタッフが優先的に派遣されるよう、また本人の希望だけでなくキャリア開発に合わせて担当者を決めるように調整した。

2. 担当には事前に手順書を配布し、活動全体のイメージ化を促した。

3. 実際に活動した看護師から派遣後に意見を聞き、運用や手順書に関する評価を繰り返した。

【取り組み後の結果】

1. 担当者のニーズやキャリア開発に沿うことで、日常業務へのモチベーションの向上につながったと考える。一方、関連部署で全ての事業を担うことは困難であり、また管理者や活動経験者の異動により関連部署内での認識が薄れ、全ての担当者に情報が行き届かない現状もあった。

2. 引率未経験であっても、活動における看護師の役割がイメージしやすく、医療者の視点で必要と思われる物品や準備などに関しても、事業者と事前に打ち合わせをすることができるようになった。一方、事前の打ち合わせを行う時間や必要物品の準備が必ずしも保証されない、個人情報保護により事前に情報が共有できないなどの現状も明らかになった。

【今後の課題】

年々多様化するニーズに加え、傷病時だけでなく災害時も含めて救護活動できるよう検討していく必要がある。運用方法を整備しHPへ手順書を掲載するなど、院内外の関係者との情報共有やフィードバックの方法に関する検討を通して、子どもや家族が安心して事業に参加できるよう支援していくことが、更なる地域連携につながると考える。

02-36

看護専門外来「手術サポート外来」の活動 ~呼吸リハビリテーションの実施~

富山赤十字病院 看護部

○松倉^{まつくら さちこ} 早知子

【はじめに】平成24年3月、看護専門外来「手術サポート外来」を開設した。過大侵襲手術を受ける患者、高齢や循環器・呼吸器系疾患のため術後合併症の発生リスクが高い患者を対象に、急性・重症患者看護専門看護師、手術看護認定看護師が関わり、安全・安心な手術、また術後合併症の予防を目的として継続したケアを行った。今回、報告の概要および活動の内容（主に呼吸リハビリテーション）を報告する。

【患者の概要】全患者数は71人、男性57人・女性14人で、平均年齢は73.0歳であった。診療科は消化器外科53人（74.6%）、心臓血管外科12人（16.9%）、呼吸器外科5人（7.0%）、耳鼻科1人（1.4%）であった。主疾患および合併症に循環器・呼吸器系疾患がある患者は59人（83.0%）であった。

【活動の内容】コンサルテーションを受け、初回の診療が術前61人（85.9%）で平均8.1日前であった。呼吸リハビリテーションは全患者71人に実施し、呼吸練習器具を用いたのは35人、他は深呼吸や排痰法を行った。内容は主治医や麻酔科医等と連携して決定した。理学療法士と共に患者や家族に目的と方法を説明し、初回の実施中の循環動態・呼吸状態の観察と自宅での実施が可能かを確認した。また生活習慣に合わせた計画を患者や家族と共に立案した。

【結果および考察】患者から、外来で「頑張っ、これ（呼吸練習器具）しない」とねや入院時に「できるようになったよ」と呼吸リハビリテーションに前向きな言葉が聞かれた。呼吸練習器具を自宅に持ち帰ることが手術に向けた身体的・精神的・社会的な準備を主体的に行う動機づけになっていた。また総吸気量が初回（外来）より入院時に増加し自宅での呼吸リハビリテーションの実施が術後の呼吸器合併症の予防につながっていた。初回の診療が術前61人の転帰は、退院57人（93.4%）、死亡4人（6.5%）であった。